



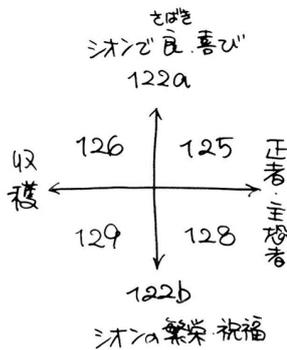
都上りの詩篇
詩篇125篇

詩125

2012.12.17



(中略) とこにシオンにエルサレムと云む (中略) (主の恵みおこしえ)
 1-2. 主信頼者はシオンの山. 主は民エルサレムを囲む. (中略)
 3. 悪の手 ~~X~~ → 正者の地. 正者の手 ~~X~~ → 不正
 4. 良者・直者に良きこと. (主は良き方)
 5. 曲者・不正者を運去る. = 主に似る者. (忠実と良き者)



125. 主が良者とされるのか. - 主に信頼 (恵み受). 良い道に歩む.
 128. 主が祝福されるのか. - 主に恐る.
 + 実を結ぶ. 繁栄. いのち.
 シャロームがあるように.

詩篇125篇。都上りの詩篇の3つに分けたうちの2つ目。125篇から129篇になっています。125篇は「イスラエルの上に平和があるように」。128篇も「イスラエルの上に平和があるように」。122篇と並行して見なければならぬ段落です。

125篇は4つの段落に分けられて、1節から2節で、3節のところは「なぜなら」という接続詞が入っています。4節があつて、5節には「そして」という接続詞が入っていますので、1節から3節と、4節から5節。1節から3節の方は、主に信頼する者は、シオンの山のように揺るがない。その山から外に手を伸ばさず、山には手が伸びてこないという、守られる話が3節に書かれています。4節は、良い者、まっすぐな者で、その人にいつくしみを施してくださいの「いつくしみ」は良い、トブを与えてください。トブな人にトブ。5節では、まっすぐに対して、曲がっている、不正を行う者は消えていくという125篇です。

125篇の全体の内容は、どういうものなのかを他の詩篇、128篇と比べてください。128篇と比べると、この都上りの中で、特に、誰が良い者とされるのか、誰が祝福を受けるのかというのが、この125篇と128篇の中心の課題になっていますね。

125篇は、誰が良しとされるのか、主に信頼して良い道に歩む者である。誰が祝福をされるのか、誰が実を結ぶのか、繁栄するのか、いのちを与えられるのかという128篇は、主を恐れる者である。両方合わせてシャローム。シャロームな人だということ

す。シャロームな人というのは、125篇と128篇を合わせて考えなさいと言われているものだと思いますけれど、詩編15篇のように「誰が主の山に登れるのか」というものの答えのような内容になっていますね。

1節から3節の方は忠実であること、4節と5節は良いものであるということなのですが、これは主をほめたたえる時の言い方です。なぜなら、「主は良い。良き方」「その恵みはとこしえまで」いうその2つにあたるでしょう。1節から3節は、主の恵みはとこしえまで。主は恵み、その愛は、その忠実さは、とこしえまでというのが、1節から3節。4節と5節は、主は良い方であるというのに対応している。それを主についていうのではなくて、正しい者、主に信頼する者、良い者について言っていますので、この良しとされる者というのは、主に似ている者である。主を恐れる者も主に似ている者なので、主の祝福を受けられるということが、この125篇の概略と他の詩篇とのつながりというところで大切になると思います。122篇とのつながりは、また全体のつながりの中で考えてくださいね。